

保育の要諦



① 倉橋惣三先生と附属幼稚園

倉橋惣三先生が、どのように、現在の日本の幼稚園の教育に、もっと端的に言えば、わたしどものお茶の水の附属幼稚園の中に生きているか、それを私はお話してみたい、と思つているのです。それは同時に、私なりに、幼児の教育がどうあるのがのぞましいかを語ることになると思いますが、このことはたいへんな冒険であることを知っています。先生の死後十年、まだ、先生といっしょにはたつき、歴史や伝統を荷っている人たちを面前において、私見を述べるのはまことに大胆すぎるのですが、あえてやってみたいと思ひます。

先ず、「保育の要諦」といった題名をつけたわけから申し述べなければなりません。

坂元彦太郎

実は、昭和八年（一九三三年）八月に、この日本幼稚園協会主催の第一回夏期講習会が開かれ、倉橋先生は「保育の真諦」という題のもとに、六日間、毎朝二時間ずつ講演をされたのです。その前年の末に、女高師とともに附属幼稚園が現在のところに移転してきて新装の大講堂でこの講習会が開かれたわけです。真諦というのは、精髓とか、エキス、エッセンスといった意味だ、と先生は説明をしていますが、この講演が翌年出版されたときは「幼稚園保育法真諦」と名づけられ、戦後再刊されたときは「幼稚園真諦」とよばれ、それが、この度新刊の「倉橋惣三選集」第一巻におさめられているのです。

私が、この論の題名を「保育の要諦」としたのは、倉橋先生にいわばあやかりたいと思つたためですが、真諦というと僭越すぎるので、要諦としてみました。

ところで、お茶の水の附属幼稚園は、明治九年に設立され、明年

九十周年を迎えることになっていますが、倉橋先生はその半分の期間を関係しています。こうした九十周年を背景にして、現在の附属幼稚園があるわけです。

この一世紀に近い間で、附属幼稚園にとっても、また倉橋先生にとっても、大正六年（一九一七年）と、昭和八年（一九三三年）とが、二つの特筆すべき画期的な年であったといえると思います。先ず、この二つの時期を中心にして、倉橋先生のしごとや影響のことを考えることにしましょう。

一、大正六年を中心にして

大正六年（一九一七年）は、倉橋先生がはじめて附属幼稚園主事になられた年です。先生は、一高生時代すでに幼稚園にきて園児らと遊んでおられたが、明治三十九年、東大を卒業され、明治四十三年には東京女高師の講師となられ、この大正六年に同校教授となり、幼稚園主事をつとめることになった。そして同じ年に、自分が主幹となっていたフレール会を改称して日本幼稚園協会とし、雑誌「婦人と子供」を「幼児の教育」と改名されたのである。これらは、みんな先生に直接に関係のあったことであるが、そこにいろいろな意義を認めることができるのです。

ちょうどそのころは、第一次世界大戦の直後で、世界中に教育の革新運動がおこり、日本にもその波が押し寄せてきていた。ご承知

のダルトン・フランなどもそのころ提唱されたものです。さらに、教育界だけでなく、一般的に、いわゆるデモクラシーの思想や、ヒューマンイズムの考え方がひろがってきた時代なのである。こういう時代のふんいきをバックとして、倉橋先生が幼児教育に当たられたと見るのが、私はしぜんであると思います。

倉橋先生が主事になられるとすぐ、朝の「会集」をやめたことと、恩物をかごにぶちまけて普通の積木なみにあつかうようにしたこと、が有名になっています。そして、それが先生が新しい保育を推進した先達であることの語り草になっているのです。

たしかに、倉橋先生はすぐれた先覚者であったにちがいないが、ひとりで独断的にそうした思い切ったことをやったというよりも、先ず、いま述べたようなその時代の精神や動きを背景にしているのであり、このようなことはほかの教育分野では珍しいことではなかったのではないのでしょうか。その上に、附属幼稚園自体の中にも、先生の思想を受け入れ、こうした思い切った革新がなされてもいい下地ができていた、と私は考えるのです。

先ず、「会集」のことを考えてみましょう。ここで、会集というのは、毎日、開園のときに園内の全部の幼児を一堂に集めて、三十分ぐらいの集会をしたようなことを意味しているのですが、たしかに、明治初期の記録などをみると、そのようなことが行なわれていた事実があると思われまます。ところが、お茶の水の附属幼稚園に、明治二十七年の附属幼稚園一覽というのが残っておりますが、それ

をみると、会集は月曜と金曜とだけ行なわれるようになっていいます。大正六年になるまで、それがつづいていたようですが、こういうふうな漸進的な改革がそのころの主事（中村五六氏か）などを中心におこなわれていたのです。

会集と同時に「時間割り」といわれていたものもやめるようになってきました。時間割りというのは、ちょうど、現在の小学校や中学校でみられるような様式で、大体、三十分きざみでその一単限にそれぞれのしごとを割り当てたものです。初期であればあるほど、いわゆる恩物によっての勉強の時間が多かったのですが、いまあげた附属幼稚園の、明治二十七年の「時間割り」は、会集が一週二度に減っているだけでなく、恩物の時間もぐっと少なくなり、「外遊」という時間が目立って多くなっています。附属幼稚園に五組あって、外遊びの一番少ない組でも、一週二十五時間のうちの半分が外遊びで、多い組は二十時間になっているのです。これは、のちの新しいやり方に基づいてきてきているといえましょう。

倉橋先生は、このような会集や、きゅうくつな形式的な時間割りをやめるとともに、恩物もまた、在来の、神秘的な意義をくっつけた形式的な取り扱いをやめて、いわば、普通の積木としてあそぶように、あのきちつと恩物をしまっておく木箱から、ざるにぶちまけて自由に遊ばせるようにしたわけです。しかし、今述べてきたように、それをあえてできるだけの下地ができていたのだ、と私は思うのです。だから、恩物をぶちまけても、会集を廃止しても、教育上

の反感やレジスタンスをひきおこさなかった、そういう状態での改革であった、と思われまます。

少し、話が横道になりますが、永年倉橋先生の下ではたらいっていた先生は異口同音に、「先生は自分の方から、こうしろというようにことを、はつきりはおっしゃらなかった」といわれます。このことは私は次のように解釈します。すでに先生方がやっておられることに含まれているものに、倉橋先生がぼやっと頭で考え感じていたところの具体化をみだし、以心伝心に、倉橋先生は自分の思想をはつきりとさせ、一般の先生方は倉橋先生の考えを感得するのだ、と。また、ときには、倉橋先生が園の内外で一般的にはなしておられたことが、園にもどってきて、園の先生方がそれになびく、といったこともあると思われまます。いずれにしても、倉橋先生と園の先生との間に、暗黙のうちにお互いの気持ちを感じ、互いに影響しあいつながら、この幼稚園の教育をすすめてこられたのです。

したがって、はつきりと倉橋先生が積極的に意志表示をしたことは、会集を、時間割りを、恩物をやめようという一連のことだけだったかも知れませんが、そのことがすでに下地が熟していたばかりでなく、そうした外面的な改革の奥にある、もっと深い内面的な精神が育っていて、その口火を倉橋先生がつけたものであるといえましよう。

実は、先生は昭和二十四年暮におやめになるまで、ずっと附属幼稚園主事であったわけではありません。二年ほど外遊され、また、

六年ほど附属高等女学校主事になられ、途中、八年もぬけているのです。長い間附属幼稚園につとめていた方には、倉橋先生が途中でぬけたり、また、復帰したりしたことによって、何か変わったことがあったか、と、私はたずねるのですが、先生方は、首をかしげ、どうも全然変わったことはなかった、ほとんど特別に意識しなかった、といわれる。いいかえれば、その間、倉橋先生と通ずるものが一貫して流れていて、倉橋個人だけでやられたものではないが、先生自身もが参加している伝統が根づよく生きている、ということでしょう。その伝統は、時と場合にに応じて弾力的に変化しながら、生き抜いて現在に至っているのです。

二、昭和八年とその後

倉橋先生が、最後に附属幼稚園主事に復帰されたのは、昭和五年であり、そのころから、附属幼稚園を含む女高師の、現在の大家の土地への新築移転のことがおこなわれた。昭和七年末に、新築の幼稚園に移って、その翌年の昭和八年ごろが、倉橋先生にとっては、幼児教育におけるその活動の一つのピークであったといっているのではないのでしょうか。

前述の通り、昭和八年（一九三三年）の夏の日本幼稚園協会の講習で、はじめて、まとまった幼稚園教育の全般にわたる先生の考えが発表された。それが、いまでは「幼稚園真諦」という著書になっ

ているのですが、これは先生にとって、理論と実際の両方面にわたり、幼児教育への熱情と叡智と経験とを一体にして、新しい、のぞましい保育のあり方を述べた、最初で最後のものではあったといえるだけでなく、おそらく、日本の幼児教育界において、これに類するものは空前であるだけでなく、今後もありえないでしょう。こうした、あけっぴろげなロマンチックな夢に満ちた、実践的な書物、しかも、しんにはしっかりと学識と識見とに貫かれているような書物は、普通の学者には、ことに現代のわれわれには、てれくささも加わって、とても書くことができないものです。

こうした倉橋先生の思想なり態度が、大にしては、日本の幼児教育界の動向に、小にしても、附属幼稚園の実際の保育の展開に支えられ、そこから生れ育ってきたものであり、そしてまた、逆に、こうしたまとめによってこれらが育っていくものであることは、いまさらいうまでもありません。

しかし、この際、一つだけ指摘しておきたいことは、一九三三年（昭和八年）は、ときあたかも、米の新経済政策以後、アメリカでは各方面に新教育運動が盛んになり、こどもの生活や活動を中心とした教育の進歩的な改革が盛んに提唱され、実施されていたころであることです。この風潮は、むろんわが国にもひろがっていて、さまざまな教育面でその実施が試みられていましたが、倉橋先生のしごと当然そのうちの一つの波と考えられていいのです。その当時のこうした流れの中に自らをひたしていた私自身、いわば、昭和

初期の新教育の残党である私たちには、倉橋先生の考え方や態度に心からの親近さを感じずにはいられないのです。

しかし、倉橋先生もいつも順調な明るい日ばかりであったとはいえませんが、ことに、世間が太平洋戦争へ傾いていったころ、昭和十六・七年ごろは、おそらく先生にとって苦悩のときであったのではないのでしょうか。倉橋先生やまた、わたしたちのように、ヒューマニズムや子どもたちの自由や生活を尊重するような考えをもった者たちは、戦争によって、多かれ少なかれ、いろいろな圧力を受けたのです。

わたしは、自分自身への反省の意味もあって、倉橋先生のそのころの言説に特に関心をもって調べてみました。くわしく述べる余裕はないだけでなく、故意に痛いところに触れるのもいかがかと思うので、かんたんに私の見たところを述べておこうと思います。

たしかに、ああいう事態になった場合、国民と運命をともし、戦争に協力するようになるのは、やむを得ないことであろう。しかし、それでいて、どのような譲歩や妥協をして、子どもたちの幸福や自分たちの道を守るか、ということには、責任をもたねばならない。そういう点に、倉橋先生はどういうふうに生き抜かれたであろうか。

昭和十六年ごろから先生の論調が変わってきて、十八年には「幼児教育」に「戦時国民幼稚園」という題で長い文章を書き、幼児教育もいままでの自由主義的なやり方ではなく、大東亜共栄圏の建設

に努力すべきだ、としておられる。しかしながら、その同じ号に、数年前と同じように、前から先生が提唱してきた誘導保育のことがそのままのっているのである。巻頭には、軍国的なことをのせながら、実際のいとなみは従前どおりであり、このようにして、いわゆる戦時保育所に切りかえよ、という圧力に対しても、幼稚園を守りぬかれたのだ、と私は解しているのです。その苦衷を心から同情しているのです。

も一つ、倉橋先生についていいたいことは、先生はいつでも幼児教育界の主流にいて、みんなからだいにされた、ということではありません。幼児教育界において、先生の主張が百パーセント実施はされなかったとしても、大勢としては、いつも暖かく好感をもって迎えられる、少なくとも方向を指示する旗手として扱われていた、のは疑いなくところでしょう。社会的にいっても、皇太子がお生れのことには宮中に奉仕したり、天皇に幼児教育のことを進講なさったことなどは、戦前のこととしては、まことに異例のことであって、先生の社会的な位置がうかがわれるのです。このようなことは、他の教育部門において先生と似たような思想傾向で実績をあげた人たちには、全く思いもよらない処遇であったのです。戦後にしても、教育刷新委員会（現在の中央教育審議会にあたる）の委員として活動されたが、専門学校の平教授では先生だけであり、また、戦後できた、幼稚園保育所が全部加入した、全国保育連盟の会長に、その解散まで推挙されていたことなども、決して外の部門ではないことな

のである。

三、戦後のこと

たいへん僭越であるが、私が直接に倉橋先生に接したことについても、少しばかり語りたいと思う。私は、昭和二十一年三月、一教師より、文部省の青少年教育課長を命ぜられてから、先生との触れ合いがはじまる。私のしごとは、戦後の教育制度のたてなおしであった。そのとき、倉橋先生が私の室をたずねてこられ、懇意にして頂き、何かと教えてもらったのである。

たとえば、学校教育法の草案をつくるにつれて、特に、幼稚園をその中に加えることについて、相談ののって頂いた。幼稚園を学校の一つとして、正規の教育機関の一部とすることには、文部省の内部の一部にも、また、外部にも反対の人びとがあったが、先生はその意義を理解して、快く賛成された。そのとき、一部の反対をやわらげるために、外の学校を改名すると同じように、幼稚園を幼児園と改称する案も考えられることを先生にお話して意見をもとめたところ、「幼稚園という名前に、関係者たちの経験と伝統と熱情とがこもっているのだ」とのこと、私も名前を変えないでいこうと決意したのであった。

昭和二十二年になって、保育要領を、小・中学校における学習指導要領と同じような意味でつくろうということになって、倉橋先生

をも一応わずらわすことになった。ところが、そのころ、アメリカの指導官として来任していたヘファナン女史は、アメリカにおける初等教育の大立物で、カリフォルニア州の初等教育局長をすくらしいの人であった。同女史のサジェスチョンによって保育要領をつくることとなったのであるが、率直に打ち明けていえば、同女史と倉橋先生との間は、必ずしもなめらかなものではなかった。同女史はそう明な人で、すぐ日本の伝統などを理解してくれるようになったのではあるが、一口にいえば、両雄ならびたらず、といった工合で、双方ともが大物でありすぎたのであろう。

それで、保育要領の実際の執筆に当っては倉橋先生をわずらわさないで、山下俊郎氏その他の方々にやって頂いた、中には、里見静江氏などの厚生省関係の人をも含めた。この要領の骨子についてはヘファナン女史の示唆を受けたが、細部の執筆は全く日本人がやったものである。私は、この要領の中に、わが幼児教育の伝統、倉橋的な精神を盛りこむことにとめた。そして、私は、同書の第一章前書きを書いたが、そのいちばん最後の行に次のようにした。

「幼児のことに関心をもっている教師や保母や母親たちが心から幼児に對する深い愛情に燃え、幼児のために、天国のようにあたたかく楽しい環境をととのえようとする熱意にみだされていることが、いっさいの根本であることはいままでもない。あなた方の清らかな愛情からわき出た献身が将来の明るい日本のいしずえを築くのである。」

わたしは、ひそかに倉橋的な文章で、それまでの先生の労苦に報いたい、といった気持ちもあって、このようなセンチメンタリズムをあえてしたのであった。

その保育要領を受けた、幼稚園教育要領もまた、決して倉橋的な軌道を踏みはずしたものでなかった。ことに、昭和三十九年度から実施された改訂幼稚園教育要領は、私とその改訂委員長となったため、倉橋精神の基本方向を保持するに つとめたつもりである。

また、私は、倉橋先生が主事をされた、附属幼稚園の次の次の園長となって、先生がのこした生命に参与している。七年の園長生活のうち、ときどき、この幼稚園の姿のどことどこに倉橋先生が生きているかを考えてみる。

途中から乗船してきた私のような者は、船の重さをずしりと感じて、それを自分のかじで自由に動かそうとは思えないのである。むしろ、その情勢にのってそれを利用するなり身を任せるなりする外はないのである。

倉橋先生も、程度の差こそあれ、同じような感じをもたれたのではなからうか。語り草になっていることに、倉橋先生はよくこどもたちと遊ばれたが、身だしなみがきちんとしていてハイカラな先生に、幼児たちはそういうことをかまわずに先生にとびついてくるので、先生は先生方の助けをもとめて逃げてかえられたものだ、という。それもほんとはであろうが、私の経験から察すれば、こどもたちの中にはどうしても入りこんでいけない一線があることである。と

いうのは、こどもたちは受持ちの先生とかたく深く結びついていて、実際家としてのテクニクも備えていない園長とは、がまんができる間は遊んでくれるが、その限度がくるとなかまからいびり出してしまふのである。私は、倉橋先生もよくこのことを知っていたのではないかと思う。したがって、また（論が少し飛躍するが）園の教育の実際や方向を自分の力で左右できるとは思っておられなかったことと思う。

端的にいえば、園の生命は倉橋先生だけでなく多くの人たちの汗と熱とを貪欲にむきぼりとして育ってきたもので、そのどこが誰のせいであるかなど、はつきりしたものではない。すなおにそれ自身をまかせながら、時と場に応じて弾力的に対処する、これがまた、倉橋的な考え方ではないでしょうか。

倉橋先生が幼児を愛し、幼児教育に献身して、わが国の幼児教育の父と慕われるようにさえなられたことは、先生の心からの喜びであり、幸福であったことは、疑いのないところです。しかし、それと同時に、先生はいろいろな方面にすぐれたものをもっていて、たとえば芸術的な天分についてはすばらしいものがあつたと思われまふ。先生がものされた樋口一葉研究が、山本健吉などの文芸批評家に絶賛を受けていることなど、あまり知られてないようですが、かえって、先生の魅力のもとでもあり、幼児教育の先達とおおがれるようになったのかも知れません。広く深い人間としての先生が、幼児教育に生涯を托することになってしまったことの運命を、どう考

えたらいいでしょうか。

② 保育の秘密

お茶の水の附属幼稚園で、毎年六月に開く実際保育研究会に、参加された方の一部から、どうして、講堂の壇上で子どもたちがあのようにたのしく遊んだり、きちっと片づけたりするのか、そのわけはどういうことか、とたずねられることがあります。また、ときたま、園を参観された方からも、どうしてあんなによく遊ぶのか、ひとりで遊んでるかと思うとごくせんにグループをつくってあそんだりするのは、どういふふうにしてなのか、という問に接します。この園のいとなみにむろん長短ともあることを知っていながら、そういうふうになる、うらにかくれているわけ、いわば秘密をさぐりだしてみたい、と私は考えるようになりました。講堂での幼児たちの活動は、決して前もっては仕込んでおいたのではないのに、わずか入園後二か月たたない三歳、四歳の子どもが、ひとりひとり名優のようにふるまっているのです。

一口でいえば、この園の伝統の中にその秘密があるといえましよう。倉橋先生をも含めて、多くの方が長い間積みあげてきたものの中に、何かがあるはずで。ここが倉橋先生のもの、ここが誰のもの、といった区別はできるものではありませんが、その中に含まれている、基本的なもので、すぐ外からは見えないようなものを、ひ

とつひとつつかみだしてみよう、と私は考えたのです。

むろん、ここには倉橋流の「子どもの方へ教育をもっていく」とか、「子どもの生活において子どもを教育していく」といった精神が一貫していますし、子どもたちはのびのびと明るく、そしてどこかにしまりがあるような生活をしている——こういうことがでくる秘密をさぐろうとしたわたしは、いくつかのポイントに気づいたが、それは、一方からみれば、たわいもないほど平凡な、あたりまえのことでもありました。

上手におどったり、歌をうたったり、絵をかいたりすることもむろんたいせつなことですが、そういうことの奥にあり、そういうことの基礎になっている要因、先生方の中にしみついている基本的な考え方ややり方を私見に従って次に述べることにしましょう。

一、ひとりひとりの子どもをたいせつにする

このことが、教育の根本の態度であることは自明なことなのですが、これを徹底的に、どこまでも守り抜く気持ちです。ただ観念的に理想として考えているだけでなく、現実具体的にその気持ちを行動に現わして、どこまでもやりとおすことです。何よりも先ず、ひとりひとりの子どもと、先生はそれぞれしっかり結びつく、そこに相互にとけあった信頼感、おたがいが一体になったようなラポール、の成立が、先ず何よりも先のことです。ひとりひとりの

子どもが入園してくる最初の瞬間から、ひとりひとりに応じた、しんぼうづよい愛情の交換が行なわれます。母親の手を離れて幼児を受けとったときから全身全霊をこめた愛情的な接触をはじめるわけです。

ひとりひとりとしっかり結びついて、ひとりひとりのもっているものをたいせつに伸ばしていく、という根本のたてまえで、それをさらに具体化した次のような点を重点においているようです。

(1) ひとりで遊ぶ

幼稚園は、たいていの場合、幼児にとって集団生活をはじめて経験するところであり、そこに幼稚園の意義があることは当然であります。しかしながら、幼児が集団生活をりっぱにできるようにする前に、幼児がひとりで遊べるようになっていなければならないと思えます。幼稚園に入ってくる前に、年長児などの中には、新しい生活場面にはいっても、もうひとりで結構あそべるようになっていている者も多いでしょうが、三、四歳では、自分の家庭以外に出て、安定してひとりで遊べるようになっていない幼児がふつうでしょう。こういう場合は、何といってもまず、ひとりひとりの幼児に応じた適切な仕方、ひとりで遊ぶことができるようにしむけることがたいせつだ、と附属幼稚園の先生たちは心から考えていて、そのことに先ず努力するのです。

みんなと遊べるようになるために、その前に先ず、ひとりで遊ぶことができるように、しんぼうづよく、慎重に子どもたちと接する

のです。ある幼児は、どこかすみっこのかけにはいって、あり合わせのおもちゃを手なぐさみするでしょう。ある幼児は、庭に出てふと手にした小さなシャベルで砂をいじるでしょう。こういう幼児を、絶えずあたたかいまなざしで追っていて、このチャンスをしゅうぶんに利用して、しだいに自分で遊ぶきっかけをみつけ、ある程度の長さの期間をおちついてあそぶことができ、さらに、自分でつぎの遊びをみつけることができるように、しむけていきます。

ときには、ある幼児が、しょげいなさそうにぼんやりつつ立っています、めざとくそのけいはを察知した先生が、すつとその前に出て、子どもと一対一であそびはじめます、こういう機会もたえず、しんぼうづよく待っています。

ひとりで遊べるようにするには、先生の愛情がいわば部屋中になぎついでいて、また、さまざまなおもちゃ遊具などがそろえてある、ということがたいせつなわけです。

(2) 先生と遊ぶ

すでに述べたように、先生と遊ぶ、ことはひとりで遊ぶこととならんでおこなわれるもので、どちらが先ということとはきまっています。先ず、ひとりで遊んでいるところに、先生がはいってきて、二人で気持ちを通わせてあそぶこともあれば、先ず、先生がうまいチャンスをつかまえるなどして、幼児と一対一であそぶようになり、それから、幼児がひとりで遊べるようになる、という場合もあるでしょう。

先生とあそぶことが、先生と親しみ愛情をかわすことであり、それが幼児の園における安定感ないしはおちつきをもたらすものである。ここに、幼児を中心にして、母親と先生と幼児との三角関係みたくなものができあがるのですが、これは対立や離反を含むものでなく、いわば融合的な三角関係であって、先生に対して、幼児は、母親に対するのとは別種であるが、同じように全身をまかせきするような愛情をもつようになります。

一対一で、ひとりひとりの幼児と、先生が骨惜しみなく遊ぶことが、幼児教育の最大にして最初の出発点であることを深く感得して、こうした入園の初期ばかりでなく、のちのちまでこうした心構えでこどもに接することを忘れないことです。幼児教育において「初心忘るべからず」というのは、このことであるといつていいでしょう。

(3) しいだいに友だちと遊べるようになる

自分で先生と遊んだり、ひとりでたのしく遊んだりしているよこで、ほかの幼児たちが同じようなことをしている。そのことに気づくようになるだけでなく、外のこどもの遊びと交錯するようなこともおこる。おもちゃをとりあったり、かんたんにゆずってやりとり、さまざまな関係がおこる。ときには、けんかやいさかきがおこるかと思えば、外から見ればなかよくやっていっているように思えることもあります。こういうふうに行っているうちに、外の幼児たちと遊べるようになってくるのです。先生は、これをしんぼうづよ

く、むしろ執ように待ち受けているので、一挙に一足とびにしようとしないうのです。

普通に行なわれている説明を使うと、こういうことになりましよう。ひとりあそびができるようになると、次には、平行遊びという形のアソビが行なわれるようになる。たとえば、同じ砂場で、幼児が二、三人似たようなことをして遊んでいる。別に同一のことを協力してやっているのではなく、ひとりひとりで別々に遊んでいるのであるが、お互いを全く意識しないのではなく、似たようなことをして遊んでいるのである。このような平行遊びの段階を、ゆっくりじゅうぶんに経験させて、一足とびに、無理にグループでやらせたり、同一のことに協力させたりすることをいそがないで、先生方は、しんぼうづよく待っているのです。

むろん、こどもたちが自由に、自分でグループをつくって遊ぶようになることが、幼稚園生活の、かけがえのないたいせつなねらいであることはいうまでもありません。しかし、そうなるためには、その前段階として、ひとりで遊ぶ、先生と遊べるものがしっかり身につく、しぜん無理なく友だちとも遊べるようになる間をじゅうぶんととる、ということをやらねばならぬ、とこの幼稚園の先生たちは思いこんでいるようです。そういう基礎の上にできる友だち関係だから、極端に我を通したり、全くひとを無視するような言動は少なくなるでしょうし、少し誇張していえば、ひとりであそぶ孤独さにも堪えることができた上での、友だちの結びつきであるために、い

っそう自分をも生かす、深い友情関係に発展することもできるのだ、といえるでしょう。

二、いろいろなものがまわりにある

いままで述べたのは、幼児とのかかわりあいについての、教師の心がまえのいちばん基礎的なことであつたが、そういうことを可能にするような物的な条件が具えてあることを見おとしてはならないでしょう。まことに平凡なことなのですが、次にあげることにしてしましよう。

(1) がらくたがいっぱいある。

附屬幼稚園の建物は三十数年前の鉄筋で、がんじょうではあるが古びていて、決して近代的な施設とはいえない。それぞれの組の部屋も同様であつて、幼児向きなのはステンドグラスの模様ぐらゐのものであろう。しかし、一歩足をそれぞれの部屋に入れてみると、はじめの人はその雑然といろいろなものが置いてあるのはびびくりすることであらう。よく見れば、決して雑然とごたごたしたままにあるのではないが、あまりにも多くの種類のいろいろなものがうず高く置いてあり、それなりにきちんと整理してはあるのである。ピアノ、テレビ、蓄音器の外には、金目のものは何もないが、古いもの、新しいもの、こまごましたおもちゃ、材料などがうずたかく積みあげてある。いちいちあげることはとてもできないが、長年の

うちに先生やこどもでつくつたものから、古いボール箱、ままご道具、積木その他の遊び道具から、こどもたちの用品をいれるロッカーや、掲示などのためにつかうつい立ての類などで、ところせましと、壁面から、でこぼこにならべてある。倉庫をそのまま移動してきたようにも思えるくらい、何もかもがひとそろえある。つまらない、古ぼけたものから、新しい材料までが、何から何まである。たいてい金のかかつていないもので、ぜいたくなどは縁のおいものである。複雑な手のこんだものよりも、単純で素朴なものが大部分である。

ある心理学者の指摘によれば、このようにがらくたがいっぱいあることが、こどもたちの精神衛生のために、その安定感をやしなうために、どのくらい役立っているか、わからない、というのです。すなわち、幼児が部屋にはいったとき、すぐ手近にあるもので遊べたり、うちにあるものと同じもので遊べたり、先生と遊ぶ材料になるものがすぐみつかつたり、また、すみっこで遊んで安定感をもつことができたり、といったように、幼児の生活の展開にことの外役立つのです。いつかは、部屋の真中で明けっぱなしで遊べるようになるためにも、ちょっとしたものがかげでおちついて遊ぶ段階が必要なことが多いのです。少し誇張していえば、幼児たちへの愛情が、もろもろのがらくたに結晶して、幼児を待ち受けているのです。

(2) 花や木や虫がいっぱい。

この屋外は、はじめての人には全く豪華に見えることがあるようである。遊具などは古い、じみなものしかないのであるが、そこにある。庭のひろさや、生え茂った木々や草花や、しぜんの傾斜を利用して木の茂った斜面や、その上の平面にある四百年の大銀杏や雑草の野など、このように、いわば大自然の恩恵がそのまま園にとりいれられているのは、東京のまん中であるだけに、おどろいてもいいことでしょう。四季の花がとりどりに咲き、若葉紅葉とそれぞれに美しく、さまざまな虫もおとずれ、野の小鳥さえ林にまがう樹にきてなく、といった自然のままが、こどもたちが走り廻るにはじゅうぶんな広さの庭のまわりにある。木の大きな枝にぶらさがったり、幹によじのぼったりするとともに、ばったやちようを追っかけたり、くもやとかげを見つけることもできる。園児のほとんど全員があそべるほどの砂場もある。

幼児たちは、屋外に出ると、入園のはじめは、自分の部屋のごく近いところでもじもじしていることも多いが、先生と連れだつて散歩したりしているうちに、自分で探険のような気持ちで歩きはじめ、その行動半径が広くなり、さまざまな遊びがはじめられる。先生も、天気がよければおりをみて庭に出る。しばらくたつと、砂場であそび、自動車の形をした箱車であそび、木々の間をくぐり抜けたり、ブランコなどで遊ぶというふうにせいいっぱいな活動をはじめめる。そして、先生方も、こどもたちが屋外で元気にあそんでるかぎり目を細くして、晴天なれば、一日のうちの大部分をこうし

た屋外で過ごしているのである。こういうことが、どんなに幼児たちを、特に都會育ちの幼児たちを、心身ともに健康なものにするかわからない、と考えられます。

さらに、見おとしてならないことは、前述の室内での遊びと、こうした屋外との遊びとの連続のことです。こどもたちは、平気で室内の遊びから屋外に出てあそび、また、しばらくすると室内にかえり、また、屋外に出て元氣であそぶ、ということをし、ごくしぜんに行なっているのです。よく世間でいわれるのは、このように自由にさせておくと、遊びがかたよってしまう、というのですが、ふしぎなことに、ここでは、さまざまなことが適度に変化してあそばれるようになっていっています。少しばかりかたよることもありませんが、先生が大目にみているうちに、せいいっぱいの活動がいつのまにかひとりひとりに応じてもたれるようになっていきます。

室内では、単純な遊具、外には、自然のままの環境、その間で、こどもたちは、あらんかぎりの力をもって動きまわります。

(3) どうらみれになつて遊ぶ。

屋外であそびのうちで、典型的で、ある意味では象徴的なのが、砂場であそびです。大体、各組に一つづつの砂場があるが、そこに盛られている砂は、関西によくある花こう岩質の白い砂とは似もつかないもので、黒っぽいねばりっこいものです。打ち明けていえば私などはじめは汚ない、とさえ感じたほどであるが、先生たちもこどもたちも、少しもへきえきしないのです。小さいこどもたち

は、しゃもじで小さな穴を掘るだけであるが、しだいに、山やみぞをつくったり、ダムをつくって水をみたしたりするようになり、いっぽうでは水でこねておだんごづくりなどをする。むろん、これらはこの園でもやられてることではあるが、この幼稚園ではこの砂場で費やす工夫と労力と時間が比較にならないほど大きいのです。

泥まみれになって遊ぶとき、子どもたちにとつては、肌へばりつく土から、大自然のあたたかさを受けとり、その腕に抱かれていのように感じるのではないだろうか。

エプロンや袖を泥でよごしたり、ズボンをどろまみれにして帰っても、お母様たちは、よく遊べてよかったね、といってほしい、ということになっています。

また、こうして砂あそびなどに専心し、没入する、ということがまたとないえものだと思われまふ。このような無我夢中の没頭が土台になって、いわゆる幼稚園らしい、絵をかいいたり歌をうたったりするような、上品な(?)活動にも没入できるようになるのだ、と思います。

このような没入の態度と自然との一体感とが、自由ののびのびと遊ばせているうちに幼児に体得され、これが基礎となって幼稚園での生活が築かれていくのです。

三、少しのことをしっかりとつける

自由ののびのびと遊びに没入させていて、それで、しまりやきまりを失わないようにする、というには、それなりの秘密がありまふ。倉橋先生が、自由な子どもの遊びを提唱して、生活において生活が教育されるのだ、と説くにしても、その前提もしくは背後に、あるしつかりした生活の軌道をもたせることを予想しています。この附属の幼稚園の場合でも、表面には徹底的に自分で遊ばせているようなところが見えてはいますが、実は、それと同時に、最低限度の日常生活の軌道になるような、若干ののぞましい習慣を幼児の身につけることを徹底的にやっています。できるだけその数を少なくし、入念にしんぼうよく幼児の身につけさせるのです。そして、その外のことには幼児がうまくやれなくても、いわば知らぬふりをしたり、ほっておくのです。

そのいくつかの習慣育成のうちで、私が気がついたものをあげてみましょう。

(1) 登園直後のこと

朝登園してすぐの身のまわりのしまつです。靴を脱いで靴箱にしまい、上ぐつにはきかえ、弁当や外とうなど持ちものを定まったところに置き、部屋に入り、その洗面所でうがいをし、石けんて手を洗い、そして先生のところに行ってあいさつする——という一連

の行動を、みっちりとしこむのです。その幼児が園にくることを喜んでするように頑張ってさえいれば、ひとりひとりにこのことをしつけることは決して困難ではない。ひとりびとりについて、しんぼうよく愛情をもっておしえこむので、これができることと園に喜んでくるようになることが一体のようです。

(2) 上ぐつと外ぐつとはきかえ

部屋から外遊びに出るとき、屋外から室内に入るとき、必ずくつをはきかえる。それがしやすいようなくつばこの工夫もしてあって、幼児たちは少しも労をいとわず、必ずこのきまりを守るようになる。この習慣は、前述の室内での遊びと屋外での遊びとの連続と裏表になっているのであって、ひじょうに早くこの習慣はできあがるのが、ふしぎに思われるくらいです。幼児も、はじめは相当に時間をかけて苦労しているが、すぐ何でもなく容易にできるようになります。

(3) 「おならび」

特定の場合に、幼児たちを一行にちゃんとならべて待たせることを「おならび」といっているのですが、これも限られたごく少ない場合、しんぼうよく徹底的にやらせるのです。自分たちの部屋から、たとえば遊戯室のようなところにみんな移動するような場合に、先生はひとりひとり名前をよんで順次に、部屋の入口のところから縦に一列にならばせるのです。こどもたちはいそいそとならんで、みんながならびおわるまでしんぼうよく待っています。お帰

り」のときも同様にしますが、ひとりでも手洗いなどでおくれていても、ゆっくりとみんながそろうまでしずかに待っています。このとき、ひとりひとりの名をよびこどもがいそいそとならぶ有様は、別れぎわにこどもとの心のつながりをたしかめあっているように思われます。

(4) 食事の前

食事の時刻になると、こどもたちはそれぞれうがいをしたり手を洗ったりして、自分の席の前にべんとうを置いて坐ってみんながそろうのを待っている。当番でお盆ぐらいをくばることもあるが、先生がお茶をくばったり牛乳のびんをあげたりしてくれるのを待って、ひとりのこらずがちゃんとべんとうが食べられるようになってはじめて、当番がいただきますをいう。この間相当の時間がかかるが、こどもも先生も、それをじっとしんぼうしているのです。食べはじめるとみなそれぞれペースでゆっくりやっています。食べだ者は勝手に席を離れて遊びに出てもいいようになっていきます。

以上、これだけのことはしつかりしつけること、私の目についたことをあげてみました。その外のことはいわばほっておきます。たとえば、テレビを見るといふときに、集まってこないこどもがあっても、平気でそれをほっておくのです。むろん、これは、まだはじめのうちで、前述のようなしつけができあがり、園の生活にもなれてくると、しぜんに、その外の場合でも、一斉にやる必要があるなるときには、ちゃんときまりがつくようになってくるのがふしぎで

す。

いいかえれば、ほんとに必要なことの最低のことだけをやらせる、こどもにもこどもなりにその必要がわかることだけをしっかりと身につけさせるようにしているのです。

四、あとかたづけ

三にあげたこととならんで、とことんまでやらせるようにしむけるのが、あとかたづけです。三にあげたことがらとちがうところは、あとかたづけの実際のなかみは、そのときそのときでちがう点にあります。それまでにやっていた活動の種類によって、あとかたづけの内容や様相を異にするわけで、幼児たちには幼児なりに臨機の処置と努力とを必要とするわけです。そのこともあって、あとかたづけの仕方は、幼児によって相当にちがっているのですが、はじめのうちは、先生たちはこどもたちの間にまじって、こどもたちのペースと離れないようにしてあとかたづけのうちに参加しているだけで、ぐずぐずしたり、怠けたりするこどもを特に促したり、たしなめたりなどはしないのです。このようなことを度重ねているうちに、どの幼児もその幼児なりに、しんけんにあとかたづけができるようになってきます。はじめはとも時間がかかりますが、それを気ながくじつとがまんしているのです。

あとかたづけをしつかりやらせる、というのは、形式的な習慣の

わくを押しつけることではなく、それぞれの場合に応じて、融通のきく、弾力のある、実質に応じた適応の力を、はっきりした目的をもたせて、やしなうことにもなるのであり、長くかかって、しだいに、それぞれの幼児に応じた「かたづけ」の精神と技術とがやしなわれるようでありたい、愛情をもってしんぼうよく幼児をもちたててやるようにつとめるのです。

以上、わたしが、いわば客観的に附属幼稚園のいとなみを観察して、先生方の意見や説明をきかないで、つかまえた、ここの保育の底にながれている基礎的な考えです。この上に、いわゆる普通の幼児教育の内容や方法が成立しているのであって、私はそのことを説明しないので、それらが成立する根拠になっていると私が解釈しているものを抜き出してみて、あえて、保育の要諦と名づけたのです。そして、いちばんたいせつなことは、自由に心ゆくまで遊びに没入することと、ごく少数なことについてしっかりと習慣形成をすることとの間のバランスです。どちらもが適切にできあがり、しかも他の方の成立を阻害しないで、むしろ他の方が成立し基礎にさえなっている、ということですから、いうまでもなく、その奥に、幼児のひとりひとりとの心からの愛情の交流がある、ということ

註記 この小論は、倉橋先生十周年忌を記念する、昭和四十年七月二五日、日本幼稚園協会主催の夏期講習会における、同題の講論一部を改めて書きなおしたものである。